
遊戯王～銀色の魂～

ギンタマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜銀色の魂〜

【Nコード】

N4052T

【作者名】

ギンタマン

【あらすじ】

侍の国……そう呼ばれていたのは当の昔の事であった。そしてある日、かぶき町にデュエルモンスターの大会が行われた。銀時は賞金を手に入れる為、新八と神楽と共に大会に向けて頑張るのであった。

作者は上手くいくかどうか多少、自身がありません。そこは大目に見てやって下さい。

あと、ちなみに別の小説でアイデアが思い浮かばない時にやります。

第一訓 天然パーマはある意味強靱 無敵 最強（前書き）

では、銀魂と遊戯王のクロスオーバー、始まります。

銀時「ジャスト・ドゥーイット!!!」

第一訓 天然パーマはある意味強靱 無敵 最強

侍の国．．．．．そう呼ばれていたのは当の昔の話であった。
今は宇宙から天人あまんとと呼ばれる者達が地球人と共存しており、文化も随分と変わり果てた時代である。

そんな時代の中、江戸の中にかぶき町という場所では『万屋銀ちゃん』と看板が書かれていた建物があつた。

『万屋銀ちゃん』．．．それは依頼と料金を受ければなんでもやる仕事である。

しかし依頼は滅多に無く、報酬もあまり手に入らない為、状況は普段最悪である。

食事すらまともにも出来ない位営業是最悪である。

そんなある日．．．．．

「ただいま〜！ お前たち、チューパット買ってきたぞ。」

その万屋に入ってきたのは腰に木刀を納めた死んだ魚のような目をした銀髪の天然パーマの男であつた。

彼の顔はまさにダメ人間同然の顔である。

彼の名は坂田さかた 銀時ぎんとき、『万屋銀ちゃん』のオーナーである。

好物は甘いものであり、血糖値が糖尿病寸前の領域に達しているほどの甘党である。

「あ、銀さん！」

「銀ちゃん、お帰りアル！」

居間室には赤いチャイナドレスを着たオレンジ色の髪をした女の子とメガネをかけた少年がいた。

2人はテーブルの上にカードを並べていた。

「何やってんだ、お前ら？」

銀時は2人に聞きだす。

「僕たちは今、デュエルをやっているんですよ。」

メガネをかけている少年が答えた。

彼の名は志村^{しむらう}新八^{しんぱち}……江戸1番のツツコミ担当である。戦闘力は一般的であり、個性は地味で哀れなキャラである。

「ちよつと作者！！ 僕の紹介が酷くない！？ 何でこんな形なの！？」

「仕方ねえだろ。 お前は所詮そんなキャラだから。」

「銀ちゃんの言う通りアル。 ダメガネはダメガネらしく自分を受け入れるネ。」

「お前ら……」

新八は怒りに任せて拳をあげたが抑えた。

なぜならあの2人を喧嘩の相手にしても全く歯が立たないからである。

「それはともかく、銀さんは遊戯王を知っていますよね？」

「当たり前だろ。俺は何年ジャンプを愛読していると思ってんだ？」

「じゃあ、銀ちゃんも遊戯王をやっているアルか？」

銀時の反応に対してチャイナドレスの少女が聞いた。

彼女の名は神楽^{かぐら}。

見た目は可愛いらしい女の子だが、毒舌で大食いなのが玉に瑕である。

ちなみに彼女は宇宙最強の戦闘種族、夜兎の1人であり、人間離れをした怪力と身体能力の持ち主である。

「まあ、やってたな・・・お前らが万屋に入る前は。」

「そうなんですか。じゃあ、僕とやりませんか？」

「新八ずるいアル！ 私が銀ちゃんの相手になるねん！」

「じゃあ、このデュエルで勝った人が銀さんとデュエルする事にしようよ。」

「そうアル！ じゃあ、私のターンアル！」

「仕方ないな・・・じゃあ、俺はデッキを取って来るからな。」

そう言って銀時はデッキを取る為に部屋に入った。

そして・・・

「……………でダイレクトアタックアル！」

新八 L P O

「やったー！ 新八に勝ったアル！」

「うわ〜負けちゃった〜！」

「だからお前は新八だネ。」

「どういう意味だよ!？」

「とりあえず銀ちゃんの相手は私アル！」

「お〜い、終わったか？」

2人がはしゃぎあっている中、銀時が戻ってきた。

「銀ちゃん！ デュエルに勝ったよ！ だから私が銀ちゃんの相手になるネ。」

「そうか．．．じゃあ新八、席をどけ。」

「あ、はい。」

新八はソファから退き、銀時に席を譲った。

「じゃあ準備できてるか、神楽？ 言っとくけど俺は大会で4位に

入ったことがあるぞ。」

「マジアルか!? バトルシティNo.4になったアルか?」

「おい、俺をあんな凡骨と一緒にするな。」

「じゃあ始めるネ!」

大会で4位になった実力……いったいどんなデッキであるのだろうか。

「デュエル!!」

銀時 LP8000

VS

神楽 LP8000

「じゃあ、先攻はもらうアル!」

「はいはい、どうぞ。(神楽のデッキは一体なんだ……)」

「私のターン! 私はモンスターをセットするネ! そしてカードをセットし、ターンエンドアル!」

神楽 / LP8000

手札4枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター1体

魔法・罨ノリバース×1

「俺のターン！俺はサイバー・ドラゴンを特殊召喚する！サイバー・ドラゴンは相手フィールドにモンスターが存在し、自分のフィールドに存在しない時、特殊召喚する事が出来る。」

サイバー・ドラゴン

5

ATK2100

「さらに、俺はカイザー・シーホースを召喚する。」

カイザー・シーホース

4

ATK1700

「じゃあ、サイバー・ドラゴンでそのモンスターを攻撃だ。エヴオリューション・バースト！」

魔導雑貨商人

1

DEF700

「私のモンスターは魔導雑貨商人アル！ このモンスターのリバース効果により、デッキの上から魔法・罫カードが手札に加わるまでモンスターを墓地に送るアル！」

墓地に送るモンスター

ライトロード・ハンター ライコウ
クリッター

チューニング・サポーター

クイック・シンクロン

チューニング・サポーター

レベル・ステイラー

黄泉ガエル

カオス・ソーサラー

ドッペル・ウォリアー

「手札に加わるカードはエネミー・コントローラーアル！」

「（神楽のデッキは【シンクロン】か………） じゃあ、カイザー・シーホースでダイレクトアタックだ。」

「この瞬間、私はガード・ブロックを発動！ 戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウするネ！」

神楽 LP8000

「じゃあ、ターンエンドだ。」

銀時 / LP 8000

手札 4枚

モンスター / サイバー・ドラゴン、カイザー・シーホース
魔法・罠 / なし

「私のターン！ 私はシンクロン・エクスペローラーを召喚するネ！」

シンクロン・エクスペローラー

2

ATK 0

「いきなり来るか！」

「シンクロン・エクスペローラーの効果を発動アル！ 墓地のシンクロンと名の付いたモンスター、クイック・シンクロンを特殊召喚するアル！」

クイック・シンクロン

5

DEF 1400

「ここからかぶき町の女王の力を見せるアル！ レベル2のシンク
ロン・エクスプローラーとレベル5のクイック・シンクロンでレベ
ル7のニトロ・ウォリアーをシンクロ召喚するアル！」

ニトロ・ウォリアー

7

ATK2800

「手札からエネミー・コントローラーを発動！ カイザー・シーホ
ースを守備表示にするアル！」

カイザー・シーホース

4

DEF1650

「バトルフェイズに入るネ！ ニトロ・ウォリアーでサイバー・ド
ラゴンを攻撃アル！ このダメージステップ、エネミー・コントロ
ラーを発動したからニトロ・ウォリアーの攻撃力を1000ポイ
ントアップさせるネ！」

ニトロ・ウォリアー

7

ATK2800 3800

銀時 LP 8000 6300

「さらにニトロ・ウオリアーの効果を発動アル！ カイザー・シーホースを攻撃表示に変更し、追加攻撃するネ！」

ニトロ・ウオリアー

7

ATK 3800 2800

カイザー・シーホース

4

ATK 1700

銀時 LP 6300 5200

「いきなりモンスターとライフを失ったか………ロスが大きいな。」

「私はこれでターンエンドアルね！」

神楽 / LP 8000

手札 5枚

モンスター / ニトロ・ウオリアー

魔法・罠 / なし

「俺のターン！（お！ 来たか、俺の戦力。） 神楽・・・思ったより早く俺のエースが来てしまったようだ。」

「本当アルか！？」

「覚悟しろよ・・・神楽。」

銀時はニヤリと表情を浮かべた。

「一体何のカードを使うのやら・・・」

「俺は増援を発動。 デッキからレベル4以下の戦士族モンスターを手札に加える。」

「やはり銀さんは戦士族デッキですか。 イメージに合いますね。 侍だから六武衆かな？」

だが、銀時は新八の期待に裏切ったカードを加えたのであった。

「俺はデッキから正義の味方カイバマンを手札に加える。」

「えええー！！」

銀時が意外なカードを手札に加えたらしく、新八は驚いた。

「ぎ、銀さん！？ あんたのデッキつてもしかして・・・」

「ん？ ああ、そうだが。 俺は手札に加えた正義の味方 カイバマンをそのまま召喚する。」

正義の味方 カイバーマン

3

ATK200

「さらに俺はカイバーマンの効果を発動。このモンスターをリリースし、手札から青眼の白龍を特殊召喚する。」

青眼の白龍

8

ATK3000

「マジアルか！ 社長の切り札アルか!?!」

「ちょっとー!!! 銀さんと全然イメージ合わないじゃないですか!?!」

「青眼の白龍でニトロ・ウォリアーを攻撃！ 滅びのバースト・ストリーム!?!」

この時、銀時の周りにオーラのようなものが見えていた。

「うわああああ!!! あまりに強力過ぎて眩しく見えるアル!?!」

まあ、このデュエルはデュエルディスクを使っていないのでソリッド・ヴィジョンは無いのだが。

神楽 LP8000 7800

「でも、ダメージは大した事無いアル。」

「俺はカードをセットし、ターンエンドだ。」

銀時 / LP5200

手札1枚

モンスター / 青眼の白龍

魔法・罫 / リバーズ×1

「私のターン！ 私はスタンバイフェイズに黄泉ガエルを特殊召喚するアル！」

黄泉ガエル

1

DEF100

「私は手札を1枚捨ててクイック・シンクロンを特殊召喚するアル！」

クイック・シンクロン

5

ATK700

「私はクイック・シンクロンと黄泉ガエルでシンクロ召喚するアル！」

ドリル・ウォリアー

6

ATK2400

「ドリル・ウォリアーの効果を発動！ 攻撃力を半分にし、銀ちやんにダイレクトアタックアル！」

ドリル・ウォリアー

6

ATK2400 1200

「おおつと、そうはいくか。俺は立ちはだかる強敵を発動。ドリル・ウォリアーの攻撃対象をブルーアイスに変更する。」

「何iiiiiiii!?!」

「いけえ、滅びのバースト・ストリーム!!」

「NOOOO!!」

神楽はあまりの展開により、拒絶した。

神楽 LP7800 6000

「ちっ……私はカードを2枚セットし、ターンエンドアル。
（伏せたカードはミラーフォースとミラフォオを守る魔宮の賄賂……
これで何とかするしかないアル。）」

神楽 / LP6000

手札2枚

モンスター / なし

魔法・罫 / リバース×2

「じゃあ、俺のターンだな。 ドロー！ ニヤッ」

銀時は引いたカードを見て嫌な笑顔を見せた。

「俺は伝説の白石を召喚する。」

ホワイト・オブ・レジェンダ

伝説の白石

1

ATK300

「さらに俺は墓地のカイザー・シーホースと正義の味方 カイバーマンを除外し、神聖なる魂を特殊召喚する。」

神聖なる魂

6

ATK2000

「俺は伝説の白石と神聖なる魂をシンクロ素材にし、エクストラデッキからブラック・ローズ・ドラゴンをシンクロ召喚する。」

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2400

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動。 フィールド上のカードを全て破壊する。」

「え、それじゃ銀ちゃんの青眼の白龍も破壊されるアル！」

「いいんだよ、そんな事あ。 粉碎！ 玉砕！ 大喝采！！」

銀時はテンションを上げ、社長の名台詞を口にした。

「そして伝説の白石の効果を発動。 このカードが墓地へ送られた為、デッキから青眼の白龍を手札に加える。」

「でも、自分のブルーアイズを破壊してまでする必要はあるのかな
」

新八は銀時の行動に疑問を持った。

「俺は手札の青眼の白龍を捨て、トレード・インを発動。カード
を2枚ドロールド。」

「上手い！ 手札に加えたブルーアイズをコストに利用した！」

「ようし、来たか。 さすが主人公補正だな。 俺は死者蘇生を発
動。 墓地から青眼の白龍を特殊召喚する。」

青眼の白龍

8

ATK3000

「このターンで終わりだ。 俺は装備魔法、巨大化を発動。 俺の
ライフは神楽より低い為、攻撃力が倍となる。」

青眼の白龍

8

ATK3000 6000

「ブルーアイズの攻撃力が神楽ちゃんのライフポイントと同じだ！」

「これで決まりだ！ 青眼の白龍でダイレクトアタック！ 滅びのバーストストリーム！！」

「ぎゃあああああ！！！」

別にサイコデュエルでもソリッドビジョンでもないのにリアクシヨンしてしまう神楽であった。

神楽 LP60000

銀時 WINNER

「強靱！ 無敵！ 最強！！ うわっはははははは！！！」

「銀さん何で社長になってるんですか？」

「うわ~~~~銀ちゃんに速攻に倒されたアル。」

あまりにも急展開だった為、神楽は落ち込んだ。

「まあまあ、神楽ちゃんも中々良かったよ。」

「黙れメガネ。 負け犬に慰めてもらうほど落ちぶれていないネ。」

「何だと！？」

せつかく慰めているのに神楽の毒舌によって新八はキレた。

「そついや、何で急に遊戯王なんだ？」

「あ、そうそう。銀さん、万屋に行く途中、このチラシを見つけたんだ。」

銀時は新八のチラシを見た。
書かれた内容は……

デュエル大会

X月XX日に開幕！！

賞品

優勝者 賞金100万円とプロモカード
準優勝者 賞金50万円とプロモカード
準決勝に進める事が出来た者達はバックがもらえます。

「100万円だと……」

銀時はつかんだチラシを見て震え始めた。
そう、これは万屋の赤字から救うチャンスである。

「新八．．．．．神楽．．．．．」

「はい！！」

「この大会．．．．．絶対勝つぞー！！」

「おおー！！」

こうしてデュエルモンスターを巻き込んだ物語が始まった。

つづく

第一訓 天然パーマはある意味強靱 無敵 最強（後書き）

坂田 銀時

使用デッキは青眼の白龍＋光属性

名称【白夜又は強靱 無敵 最強】

神楽

使用デッキはシンクロン

名称【女王様のシンクロにひざまつきなさい】

第二訓 バーンデックって結構地味だよね（前書き）

今回は銀さんと新八のデュエルになります。

禁止制限と優先権は最新なものとなっています。

銀魂と遊戯王ZEXAL、毎週月曜日放送中。

遊馬「カットビングの勢いで俺達の活躍を見逃すなよ！」

銀時「いいんだよ、どうせDVDになれば適当にT U T A Y A と
かで借りれるから。」

第二訓 バーンデッキって結構地味だよな

さて、どれどれ．．．．．

銀時はあるリストを読んでいた。

「あ、大寒波も遂に禁止カードとなったか。」

彼が確認しているのは禁止・制限カードについてである。

禁止・制限カード．．．それはカードの効果があまりにも強力すぎる為、規制をかけられているカードである。

しばらく遊戯王をやっていたいなかった銀時は新しい禁止・制限の改訂を知らなかったため、デッキの調整をする必要があったのであった。

「オネストも制限か．．．まあ、元々一枚しか持っていなかったがな。ゴヨウ・ガードイアンは禁止カードとなって当然だな。罰が当たったんだよ、権力を振り回し過ぎて。それからカードガンナーは準制限となったか。まあ、一枚で十分だが。」

「どうです、銀さん？」

銀時がデッキを調整している所、新八が声をかけた。

「ん？ まあ、デッキの調整が終わった所だが。」

「そうですね。　そういえば銀さんはどうやってカードを集めたんですか？」

「まあ、お前らが万屋に入る前にカードショップの店番の以来を頼まれてな。　店長の気前が良くて仕事の報酬のついでに礼としてカ

ードを買った。」

「それでも凄い報酬ですね。」

確かにそうだ。

青眼の白龍デッキを譲るなんてどんだけ気前が良い店長なのだろうか。

「新八はどうやってカードを集めた。」

「僕はストラクを買って地道にカードを集めましたけど。」

「私はよっちゃん達からデュエルで勝って奪い取ったネ！」

「それってただのグールズじゃないか!!」

・良い子の皆さんはアンティルールをしないように・

「じゃあ、今度は僕とデュエルしませんか？」

「お前とか？」

「ほら、大会に出ますからお互いの実力を図り知らないとダメじゃないですか。」

新八の言うことにも一理ある。

3人は優勝を得るためには実力をよく知っておかなければならない。

「銀ちゃん気をつけるアル！ 新八は結構手ごわいアル！」

神楽も警戒する程とは新八の實力は一体どのようなものであるの
だろうか………

「じゃあ早速はじめましょう、銀さん。」

「デュエル！」

銀時 LP8000

VS

新八 LP8000

「俺のターン！ 俺はシャインエンジェルを召喚する！」

シャインエンジェル

4

ATK1400

「カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

銀時 / LP8000

手札4枚

モンスター / シャインエンジェル

「あ、銀さん。賭けをしませんか？」

「ん？ 賭けか？」

「はい、僕が勝ったら主人公の座を貰うというのは。」

「何だと!？」

実は新八は狙っていたのだ。

地味で個性が貧しいメガネキャラを卒業するには主人公を倒すしかない。

主人公である銀時にデュエルで勝つてこの小説の主人公の座を勝ち取る事を狙っていたのだ。

「ふざけるな新八、お前のような奴に銀魂を任せられるか。」

「銀ちゃんは同意するアルね。」

「神楽、俺が勝ったらどうすんだ？」

「銀ちゃんが勝ったら新八は銀ちゃんと私にSTARTER DECK2011とGENERATION FORCEを箱買いするアルね!」

「何でお前も入ってたよ。」

「いいですよ、僕が勝てれば問題ないですから。」

その発言は挑発の言葉であった。

「おいおい新八君、主人公の俺に勝てると思ってるのかい？ いいだろう、お前が勝てば主人公の座を譲ってやるよ。」

「じゃあ、僕のターンですね。 UFOタートルを召喚します。」

UFOタートル

4

ATK1400

「バトルフェイズに入り、 UFOタートルでシャインエンジェルを攻撃！」

「攻撃力は互角だな、という事で相打ちだ。 シャインエンジェルが破壊された事により、デッキからもう1体特殊召喚だ。」

「僕もUFOタートルを特殊召喚します。」

シャインエンジェル

4

ATK1400

UFOタートル

4

ATK1400

「僕はもう1度シャインエンジェルを攻撃します。」

「じゃあ、俺は効果でシャインエンジェルをリクルート。」

「僕もUFOTートルをリクルートします。」

シャインエンジェル

4

ATK1400

UFOTートル

4

ATK1400

「新八君、やめてくんない？ 真似してくるのしつこいから。」

「そういう銀さんもやめてください。リクルーターを出すならこ
うするしかありませんから。もう1度UFOTートルでシャ
インエンジェルを攻撃します。」

「じゃあ、俺はデッキから正義の味方 カイバーマンを特殊召喚す
る。」

正義の味方 カイバーマン

3

ATK200

「僕はUFOTートルの効果でデッキからプロミネンス・ドラゴンを特殊召喚します。」

プロミネンス・ドラゴン

4

ATK1500

「なるほど・・・そういうデッキか。」

「じゃあ、プロミネンス・ドラゴンで正義の味方 カイバーマンを攻撃しますね。」

銀時 LP8000 6700

「そして僕はメインフェイズ2に入ってを永續魔法、悪夢の拷問部屋を発動します。カードを1枚セットしてターンエンドです。このエンドフェイズ、プロミネンス・ドラゴンの効果で銀さんに500ポイントのダメージを与えます。」

銀時 LP6700 6200

「そして悪夢の拷問部屋の効果で300ポイントのダメージを与えます。」

銀時 LP6200 5900

新八/LP8000

手札3枚

モンスター/プロミネンス・ドラゴン

魔法・畏/悪夢の拷問部屋、リバーズ×1

「おいおい新八君、デッキまで地味かよ。」

「だからお前はいつまでも新八アル。」

「いいじゃないですか、人がどんなデッキを使っていようと!!
それからいつまでも新八ってどういう意味だコラァ!!」

「じゃあ、俺のターン! 俺はサイバー・ドラゴンを特殊召喚する
!」

サイバー・ドラゴン

5

ATK2100

「さらに、俺は異次元の女戦士を召喚する！」

異次元の女戦士

4

ATK1500

「サイバー・ドラゴンでプロミネンス・ドラゴンを攻撃！ エヴォ
リューション・バースト！」

「させません！ グラヴィティ・バインド - 超重力の網を発動！
レベル4以上のモンスターは攻撃を行えなくなります。」

「おいおい新八君、そんなだから君は地味キャラを卒業できない
んだよ。」

「余計なお世話だ！！」

「まあ、仕方ねえ。 ターンエンドだ。」

銀時 / LP5900

手札3枚

モンスター / サイバー・ドラゴン、異次元の女戦士

魔法・罫 / リバース × 1

「僕のターン！ 僕は2体目のプロミネンス・ドラゴンを召喚しま

す。」

「何！？ もうロックをかけたのか!？」

プロミネンス・ドラゴン

4

ATK1500

「カードを2枚セットしてターンエンドです。このエンドフェイズ、プロミネンス・ドラゴンの効果でダメージを与え、悪夢の拷問部屋の効果で追加ダメージを与える。」

銀時 LP5900 5400 5100

「銀さん、2体目がいることを忘れないくださいね。」

銀時 LP5100 4600 4300

新八/LP8000

手札2枚

モンスター/プロミネンス・ドラゴン2体

魔法・罫/悪夢の拷問部屋、グラヴィティ・バインド 超重力の網、リバーズx2

「俺のターン！（まずい．．．．．どうしてもプロミネンス・ドラゴンのロックを切り抜けないと大変な事になるな。ミラーフオースを伏せてあるが攻撃してこないんじゃない意味が無い．．．．．）」
「俺は手札の伝説の白石を墓地へ送り、調和の宝札を発動！カードを2枚ドローする！ ようし、さらに伝説の白石の効果を発動！ デッキから青眼の白龍を手札に加える！ そして俺は正義の味方 カイバーマンを召喚する！」

「2枚目が来たのか!？」

正義の味方 カイバーマン

3

ATK200

「俺は正義の味方 カイバーマンをリリースし、手札の青眼の白龍を特殊召喚する！」

青眼の白龍

8

ATK3000

「そして手札から滅びの爆裂疾風弾バースト・ストリームを発動！ このカードは自分の場に青眼の白龍が存在する場合のみ発動できる。相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！ これでお前のプロミネンス・ドラゴンは全滅だ！」

「ふっふっふ．．．．．」

「!?!」

「甘いですね、銀さん。僕のロックバーンがその程度で潰されると思いましたが？僕は魔宮の賄賂を発動します。これで銀さんの滅びの爆裂疾風弾の効果を無効にします。」

「何い!!」

「実は僕、考えていたんですよ。地味地味ってみんなに馬鹿にされていて、この小説で地味の実力を嫌というほど味わってもらおうとロックバーンをフル活用させるように作っていたんですよ。」

「くっ．．．なら、俺はカードをドローだ。俺はサイクロンを発動！これでグラヴィティ・バインドを破壊だ！ターンエンド！」

銀時 / LP 4300

手札 3枚

モンスター / サイバー・ドラゴン、異次元の女戦士、青眼の白龍
魔法・罠 / リバーズ × 1

「僕のターン。僕は永続魔法、燃えさかる大地を発動。そしてモンスターをセットしてカードをセット。ターンエンドです。」

「またバーンカードを増やしてきたか．．．．．（そして手札を空にした．．．という事はメタモルポットか!?!）」

「このエンドフェイス、銀さんにプロミネンス・ドラゴンの効果ダメージを与えます。」

銀時 LP 4300 3800

「そして悪夢の拷問部屋の効果を発動。」

「くっ……………」

銀時 LP 3800 3500

「まだまだ。プロミネンス・ドラゴンは2体いますよ。もう一度同じダメージを受けてもらいますよ。」

銀時 LP 3500 3000 2700

「何も出来てねえのにライフを4分の3も失うとはな……まさか新八がそんなに強いとは。」

「ふふふ……………そうですね、銀さん。地味の力を思い知ってもらいますよ。」

新八 / LP 8000

手札 0枚

モンスター / プロミネンス・ドラゴン 2体、裏側守備表示モンス
ター 1体

魔法・罨 / 悪夢の拷問部屋、グラヴィティ・バインド 超重力の
網、燃えさかる大地、リバーズ × 2

「俺のターン！」

「このスタンバイフェイズ、燃えさかる大地の効果で、そして悪夢
の拷問部屋の効果でダメージを受けてもらいます。」

銀時 LP 2700 2200 1900

「銀ちゃんのライフにだいぶ差が出来てしまったアル！」

「だが、いいカードを引いた。俺は手札の伝説の白石を捨て、ラ
イトニング・ボルテックスを発動！ 今度こそプロミネンス・ドラ
ゴンは全滅だ！！」

「させません！ 僕は2枚目の魔宮の賄賂を発動します！ ライト
ニング・ボルテックスの効果が無効にします！」

「何いい！？」

でも、やっぱり地味な戦略である。

「ちつ、だが魔宮の賄賂の効果でドローだ。そして伝説の白石の効果でデッキから青眼の白龍を手札に加える。」

新八は余裕である。
てゆうかもはや新八ではない表情である。

「(どうせあのセットされているモンスターはメタモルポットだ。だったら今使えるカードを使うしかねえな。) 俺は手札の青眼の白龍を捨て、トレード・インを発動！ カードを2枚ドローする。 ! ! !」

銀時はカードを見て反応した。

「(とりあえず、これに賭けるしかねえ!) 俺はカードを2枚セツト。そして手札からガーディアン・オブ・オーダーを特殊召喚する！ このモンスターはフィールド上に光属性モンスターが2体以上存在する時、特殊召喚することが出来る。 ターンエンドだ！」

銀時 / LP 1900

手札 0 枚

モンスター / サイバー・ドラゴン、異次元の女戦士、青眼の白龍、
ガーディアン・オブ・オーダー

魔法・罫 / リバーズ × 4

「僕のターン！ このスタンバイフェイズ、燃えさかる大地の効果でダメージを受けます。」

新八 LP8000 7500

「残念ですね．．．銀さん。　どうやら僕の勝ちみたいですね。」

新八の言うとおりである。

このターン、新八はターンエンドを宣言し、スタンバイフェイズに入ればバーンダメージで銀時のライフは0となるのだ。
しかし銀時の目は．．．

「フツ、それはどうかな？」

「え？」

．．．勝負を諦めた目ではなかった。

「俺はこのスタンバイフェイズにバトルマニアを発動！　このターン、お前のモンスターは全て攻撃しなければならない。」

「な、何！？　（まずい．．．プロミネンス・ドラゴンのロックは攻撃を封じれるけど自分から自爆したらとんでもない！　このカードに賭けるしかない！）　僕はモンスターを反転召喚する！」

メタモルポット

2

ATK700

「メタモルポットのリバーズ効果を発動！　お互いのプレイヤーは

手札を全て捨て、カードを5枚ドロウする！」

「じゃあそうさせてもらうぜ、しんぱち君。ニヤリ」

「駄目だ、全然この状況を救えるカードが来ない……ちくしょお！ メタモルポットで異次元の女戦士を攻撃！」

出来るだけ多くダメージを減らそうと新八は異次元の女戦士を攻撃対象にした。

「（やはり思ったとおりだ。バーンデッキは攻撃する必要性が無いから攻撃力が高いモンスターをそんなに入れていない。） 逃がさん！ 俺はこの瞬間、立ちはだかる強敵を発動！ 青眼の白龍を選択し、相手はこのモンスターを攻撃しなければならぬ！」

「何だとー！？」

新八 LP7500 5200

「プロミネンス・ドラゴンで青眼の白龍を攻撃！（大丈夫だ、僕のモンスターが全員自爆特攻してもライフは何とか残る！）そして手札にはミラーフォースがある！ このターンでセットすれば何とか凌げるー！！」

「甘いな、新八。バトルシテイNo.4の実力は伊達じゃないぜ。」

「銀ちゃん、さっきあんな凡骨と一緒にするなと言ってたじゃない

「アルか？」

「俺は手札のオネストの効果を発動！ 青眼の白龍の攻撃力をプロミネンス・ドラゴンの数値だけアップさせる！」

「何い！もしかしてメタモルポットの効果で手札に加わったのー！？」

「主人公補正を甘く見るなよ。」

青眼の白龍

8

ATK3000 4500

丁度青眼の究極竜と同じ攻撃力である。

「つぶれな、地味ドラゴン達よ。アルティメット・バースト！」

プロミネンス・ドラゴンは青眼の白龍に攻撃しなければならない。そして戦闘ダメージはそれぞれ3000……つまり新八の負けである。

新八 LP5200 2200 0

銀時 WINNER

「負けた……………」

「お前が主人公になるには100年早いんだよ。銀魂を甘く見ていると痛い目にあうぜ。」

「新八は負け犬だから仕方ないネ。」

「そんな言い方は無いだろ神楽ちゃん！！ 僕の方が神楽ちゃんの時より上手くやってたじゃないか！！」

「あの時は銀ちゃんの手札が良すぎただけだネ！」

「まあ理由はどうあれ新八、早速STARTER DECK201
1を2箱買って来い。」

「うっ……………」

「GENERATION FORCEの箱買いも忘れないアル！！」

「はい……………」

新八は負けたショックを背負って万屋を出て行った。

つづく

第二訓 バーンデッキって結構地味だよな（後書き）

志村 新八

使用デッキはロックバーン
名称【地味バーン】

「何で僕のデッキはそんな名前なの!？」

第三訓 外道というのはカードによって決まるものではなく使い道によって決ま

「おおっ！！ リバイス・ドラゴン発見アル！！」

「おい神楽！ そのリバイス・ドラゴンを俺にくれ！！」

「だったら銀ちゃんはサイバー・ドラゴンと守護者テイラスを私に
よこすアル！」

「くっ、サイバー・ドラゴンは譲れねえ……………」

「銀さん、ホープで十分じゃないですか。」

「負け犬は尻尾を巻いておとなしくするアル。」

「何でさっきからそんなことばっか言うの神楽ちゃん！？」

「お前が悪いんだろうが。 主人公の座を奪おうとするからそんな
るんだよ。」

こうして万屋は今日も平和であった。

大会まであと3日……万屋3人組は大会へ向けて頑張るのであ
った。

- 真選組本部 -

真選組それは江戸の治安を守る特殊警察である。

こんな事件も何もない平和なある日

プシュードクドクドクドク

黒い服を着た短い黒髪の男性はコーラ瓶を開け、コップにコーラを注いでいた。

彼の名は土方ひじかた 十四朗とじゅうしゅう、真選組の副長である。

真選組のナンバー2であり、周囲からは「鬼の副長」と呼ばれている。

万屋の銀時と似ており、彼とは対照的に瞳孔は開き気味である。格好いいのだが、女性にはもてない。

「ゴクゴクぶはー！ 夏はやっぱりコーラだな。 うん、そして俺にとって欠かせない物」

どうやら彼は今、機嫌がいいらしい。

コーラを1口飲んだ後、男は懐からある物を取り出し、コーラに注ぎ始めた。

「副長！ 局長が呼んでまってうわあ！」

男がコーラに何かを注いでいる途中、彼の部下らしき者が入ってきた。

彼は何となく新八と同じくらい地味な雰囲気をしていた。

彼の名は山崎やまざき 退ひがひ。

あだ名は「ジミー」。

「ん、山崎か？ 何だ、近藤さんが呼んでいるのか？」

「はい、大事な会議があると言って……てゆうか何を飲んでいるんですか、副長！？」

山崎は土方の行動に凄じりアクションをした。

彼がやった行動……それは普通、コーラに入れるべきではないものを混ぜていた。

それは黄色の調味料……『マヨネーズ』であった。

彼が女にもてない理由……それは彼が極度のマヨラーだったからであり、どの料理にも大量のマヨネーズを使い、飲み物とデザートまでにマヨネーズをかける趣味であった。

てゆうか気持ち悪！！

「ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ……これか？ これは俺の土方スペシャルコーラだ。お前も飲むか山崎？」

「うぶ……いや結構です、副長。それより局長が呼んでいますよ。」

山崎は土方がスペシャルコーラを飲んでいるのを見て吐き気がしたが何とか耐えた。

グツジョブ、ジミー。

「わかった、すぐに行く。」

土方はタバコを加えて部屋を開けた。
土方が入った部屋．．．．．そこには栗色のサラサラヘアの
美男子とゴリラ顔の男がいた。

「お呼びですか、近藤さん？」

「おおトシ！ 来てくれたな。」

ゴリラの方の名は近藤（こんどう）勲（しゅん）。

真選組の局長であるが、新八の姉に付きまとうストーカーでもある。

下ネタが多く、脱糞したりすることもあり、ある意味局長でありながら真選組の恥さらしでもある。

「早速だがトシ、お前は遊戯王を知っているよな？」

「ああ、オタクの霸王を目指す時にやっていましたね。」

「じゃあ、突然の事だがとつっあんが俺たち真選組をデュエル大会へ招待したんだ。」

「とつっあんが？」

「ああ、そういう事でお前に出場してもらいたいんだ。」

「近藤さん．．．．．そんな招待、断ればいいじゃないですか。」

「俺もそう思ったんだが．．．．．これは庶民達に真選組のイメージアップさせるチャンスだと思ってな。優勝すれば真選組の人

気も上がるはずだ。」

「それなら俺じゃなくてもいいじゃないですか。真選組でも他にやっている人がいるでしょう。」

「確かに俺や他の隊員もやっている奴はいるんだが、俺達は素人程度だ。それにお前は1度大会に優勝した実力があつたはずだが。」

「近藤さん……少し馬鹿馬鹿しいんでやめておきますわ。そもそも俺が遊戯王を始めたのはトツシーの呪いから開放されるためでしたんで。」

そういつて土方は部屋を出ようとした。

その時……

「土方さん、それでも副長ですかい？」

栗色のサラサラヘアをした男が声を出した。

「近藤さん。土方さんがやらないのなら俺にやらせて下せえ。」

土方さんより俺のほうが真選組に役立ちますぜイ。」

彼の名は沖田^{おきた} 総悟^{そうご}。

真選組一番隊隊長であり、剣の腕は真選組随一。

美少年のような顔つきであるが本性は腹黒く、極度のドSである。

「俺が代わりにやるんで副長の座は俺にください。」

「ピクッ!!--」

沖田の発言に土方は反応した。

「ふざけんな！ 何でそんな理由で副長の座を譲らなきゃなんねえんだ？」

「だって真選組のイメージアップのチャンスなのに一肌脱がないなんて副長失格じゃないですか。」

「近藤さん、俺がやります！ 大会出場は俺がやります。」

「いや、俺にやらして下せえ。こんなマヨラより結構役に立ちますぜ。」

「近藤さん！」

「近藤さん！」

結局こういう形で出場権利を取り合っただけであった。

「う〜〜ん、真選組からの出場は1人だからな．．．．．じゃあ、2人でデュエルしてくれ。勝った方が出場させることにしよう。」

「別にいいですけど、副長の座が手に入るなら。」

「こんな奴に奪われてたまるか！ いいだろう、受けてやる！ おい山崎！！」

「は、はい！！」

「俺のデッキを取って来い!!」

「え、俺ですか!？」

「さっさと行け!!」

「はい~~~~!!」

土方と沖田はテーブルで向き合い、それぞれのデッキを置いた。

「デュエル!!」

土方 LP8000

VS

沖田 LP8000

「じゃあ、俺のターン。俺はトーチ・ゴーレムを特殊召喚し、自分フィールドにトーチ・トークンを2体攻撃表示で特殊召喚しますア。」

トーチ・ゴーレム×2

1

ATK0

トーチ・ゴーレム

8

ATK3000

「カードを3枚セットし、ターンエンドしますア。」

沖田/LP8000

手札2枚

モンスター/トーチ・トークン2体

魔法・罫/リバーズ×3

「(トーチ・ゴーレム? 洗脳解除が狙いか?) 俺のターン!俺はサイクロンを発動!」

「じゃあ、俺はサイクロンにチェーンして罫を発動しますア。」

「（やはり来るか．．．洗脳解除が．．．．．）」

そう思っていた土方だったが．．．．．

「俺は手札を1枚捨て、カウンター罠、アヌビスの裁きを発動しますぜい。」

手札コスト

墮天使スペルビア

「!?!」

「アヌビスの裁きでサイクロンの効果を無効にし、破壊しませんが。そしてアヌビスの裁きの追加効果を発動。相手フィールド上のモンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力分相手にダメージを与える。」

「おい待て総悟、何でそんなカードを持ってんだ!?!」

「あらら、土方さん。あなたのような方がこんな事を予想しなかったですかいい?」

「うばあああ!」

土方 LP8000 5000

「くそっ……いきなりライフを3000も失った……」

「さあさあ土方さん、ターンエンドですかい？」

「くっ……俺はBF・暁のシロッコを召喚だ！ このモンスターはレベル5だが、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分のフィールドに存在しない場合、リリースなしで召喚できる！」

BF・暁のシロッコ

5

ATK2000

「させませんが、土方さん。俺は奈落の落とし穴を発動ですぜ。」

「!?!?」

「暁のシロッコを破壊し、除外するぜい。」

「カードゲームまでDSってドンだけ外道なんだオメーは!?!」

「土方さん……これが俺のデッキ、【DS・パーミッション】ですぜい。」

「DS・パーミッション!?!」

「ターンエンドですか、土方さん？」

「うぬぬぬ．．．．．俺はカードを1枚セットし、ターンエ
ン」

土方 / LP 5000

手札 3枚

モンスター / なし

魔法・罠 / リバース × 1

「俺のターン。俺は豊穰のアルテミスを召喚するぜ。」

豊穰のアルテミス

4

ATK 1600

「（くそっ．．．．．やはり総悟のデッキは基本的にエンジ
ェルパーミッションか。） 豊穰のアルテミスの召喚により、俺も奈
落の落とし穴を発動だ！」

「それはさせませんが、土方さん。俺はライフを1000払い、
盗賊の七つ道具を発動。奈落の落とし穴の効果を無効にし、破壊
しますぜ。」

沖田 LP 8000 7000

「くそ、奈落の落とし穴が封じられたか！」

「カウンター罠を発動したため、豊穰のアルテミスの効果を発動。カードをドロップしますぜ。そして俺は豊穰のアルテミスでダイレクトアタックしますア。シャイニング土方滅殺波!!」

「どんな名前付けてんだ、このドS野郎!!」

土方 LP5000 3400

「そして俺はメインフェイズ2に入り、トーチ・トークンを守備表示に変更。カードを2枚セットし、ターンエンドしますぜ。」

トーチ・トークン

1

DEF0

沖田/LP7000

手札0

モンスター/豊穰のアルテミス、トーチ・トークン2体

魔法・罠/リバーズ×2

「俺のターン！」

「この瞬間、強烈なはたき落としを発動しますア。そのドローしたカードを捨てて下せえ。」

「うっ……」

土方はやむを得ず、ドローしたカードを捨てた。

捨てたカード

B F - 漆黒のエルフィン

「じゃあ、俺はカウンター罠を発動した為、豊穰のアルテミスの効果でカードをドローしませ。」

「（またかよ……カウンター罠で相手の動きを封じつつ、アルテミスで手札を補給……まさにDSだな。）俺はB F - 蒼炎のシユラを召喚！」

B F - 蒼炎のシユラ

4

ATK1800

「（とりあえず早めに豊穰のアルテミスを破壊しないとな。）俺はB F - 蒼炎のシユラで豊穰のアルテミスを攻撃！」

「させませんぜ。俺は攻撃の無力化を発動させませア。相手の攻撃を無効にし、バトルフェイズ終了ですぜイ。そして俺は豊穰のアルテミスの効果でカードをドロー。」

「くそっ……（相手に手札を稼ぐ手助けをしてしまった。）
俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

土方 / LP 3400

手札 1枚

モンスター / BF - 蒼炎のシユラ

魔法・罨 / リバース × 1

「俺のターン。俺はカードを2枚セットしまさア。そしてモンスターをセットしますぜ。」

「（またカウンター罨を伏せたか……）」

「俺は豊穰のアルテミスを守備表示に変更し、ターンエンドしまさア。」

豊穰のアルテミス

4

DEF 1700

沖田 / LP 7000

手札 0

モンスター / 豊穰のアルテミス、トーチ・トークン2体、裏側守備表示モンスター1体

魔法・罨 / リバース × 2

「俺のターン！（総悟の奴、手札を全て伏せたという事はあのモンスターは……）自分のフィールド上に『BF』と名の付いたモンスターが存在する時、このモンスターは手札から特殊召喚できる！」

B F - 疾風のゲイル

3

A T K 1 3 0 0

「俺はB F - 疾風のゲイルの効果を発動！ 豊穰のアルテミスの攻撃力・守備力を半分にする！」

豊穰のアルテミス

4

D E F 1 7 0 0 8 5 0

「俺はB F - 蒼炎のシユラとB F - 疾風のゲイルをチューニング！ シンクロ召喚！ ブラック・ローズ・ドラゴン！」

4 + 3 〃 7

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2400

「俺はブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動！ フィールド上のカードを全てはか．．．」

「待つてくださえ、土方さん。俺はライフを2000払って神の警告を発動しますア。」

「何!？」

沖田 LP7000 5000

「ブラック・ローズ・ドラゴンのシンクロ召喚を無効にし、破壊しますぜ。そして豊穡のアルテミスの効果でカードをドローしますア。」

「くっ．．．．．だったら俺はBF・黒槍のプラストを召喚だ!」

BF・黒槍のプラスト

4

ATK1700

「BF・黒槍のプラストで豊穡のアルテミスを攻撃だ!」

「おっと、そう簡単に行かせませんぜ。俺は攻撃の無力化を発動。」

「2枚目だと!? テメー、何枚積んでんだ!?!」

「俺は豊穡のアルテミスの効果でカードをドロウしまさア。ターンエンドですかい?」

「んぐぐぐ……ターンエンドだ。」

土方 / LP 3400

手札 0 枚

モンスター / BF - 黒槍のブラスト

魔法・罫 / リバーズ × 1

「俺のターン。俺はカードを2枚セットし、エンジェルセイント天空聖者メルティウスを召喚しませ。」

天空聖者メルティウス

4

ATK 1600

「そしてモンスターを反転召喚しまさア。」

メタモルポット

2

ATK700

「やはりメタモルポットだったか……」

「どうしたんですかい、土方さん？ あんたも手札が出来て嬉しいんじゃないませんか？ カードをさらに2枚セットしてターンエンドしまさア。」

沖田 / LP5000

手札3枚

モンスター / 豊穣のアルテミス、天空聖者メルティウス、トーチ・トクン2体、メタモルポット

魔法・罠 / リバース×4

「俺のターン！（手札は稼げたが、総悟のデッキはエンジェル・パーミッション……性格からして相手を徐々に痛めつける気だな。総悟の野郎、カードゲームでまでDSかよ。）俺はBF - 極北のブリザードを召喚する！」

BF - 極北のブリザード

2

ATK1200

「俺は極北のブリザードの効果を発動！ 墓地からBF - 疾風のゲイルを特殊召喚だ！」

B F - 疾風のゲイル

3

DEF400

「そして俺はデルタ・クロウ・アンチ・リバーズを発動！ このカードは罠カードだが、『B F』が3体揃っている場合、発動可能だ！！ このカードでお前のセットされたカードを全て破壊だ！！」

「焦るなよ．．．ゲームはまだ始まったばかりだぜ、土方。」

「王様かテメーは！？」

「俺は魔宮の賄賂を発動。デルタ・クロウ・アンチ・リバーズの効果を無効にし、破壊するぜ。」

「（くそっ．．．．やはり伏せてあったか。）俺は魔宮の賄賂の効果でカードをドローだ。」

「俺はここで豊穰のアルテミスと天空聖者メルティウスの効果が発動しますんですが、その前に手札からモンスター効果を発動。」

「何！？」

「カウンター罠が発動された為、俺はトーチ・トークンをリリースし、ダーク・ボルテニスを特殊召喚します。」

ダーク・ボルテニス

8

ATK2800

「ダーク・ボルテニスだと!? 手札にあつたのか!」

「そして豊穡のアルテミスと天空聖者メルティウスの効果を発動しますぜ。アルテミスの効果でカードをドロ―し、メルティウスの効果でライフを1000ポイント回復。」

沖田 LP5000 6000

「ダーク・ボルテニスの効果を発動。土方さんの伏せカードを破壊しますぜ。」

破壊されたカード

聖なるバリア・ミラーフォース

「ラッキー、ミラフォ破壊だ〜」

「ちっ、だったら俺は疾風のゲイルの効果を発動! ダーク・ボルテニスの攻撃力・守備力を半分にする!」

「おっと、それもさせませんぜ。俺はカウンター罠、闇の幻影を

発動。 闇属性モンスターを対象にする魔法・罾・効果モンスターの効果を無効にし、破壊する。 これで疾風のゲイルは破壊ですぜ。

「!」

「さらに豊穡のアルテミスと天空聖者メルティウスの効果を発動。」

沖田 LP6000 7000

「（くそ、手札を増やしただけでなく神の警告の損失を戻しやがったか。） 俺はBF・極北のブリザードとBF・黒槍のブラストをチューニング！ BF・アームズ・ウィングをシンクロ召喚だ！」

2 + 4 = 6

BF・アームズ・ウィング

6

ATK2300

「BF・アームズ・ウィングで豊穡のアルテミスを攻撃！ BF・アームズ・ウィングは守備表示モンスターを攻撃する時、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。 その効果にチェインするカードはあるか？」

「いや〜、さすがに今度はありませんぜ。」

B F - アームズ・ウィング

6

A T K 2 3 0 0 2 8 0 0

沖田 L P 7 0 0 0 5 0 5 0

「俺はカードを2枚セットし、ターンエンドだ!」

土方 / L P 3 4 0 0

手札 3 枚

モンスター / B F - アームズ・ウィング

魔法・罫 / リバース × 2

「俺のターンですか。俺は闇の誘惑を発動。カードを2枚ドロ
ーし、手札のダーク・アームド・ドラゴンを除外しますぜ。そし
て俺はメタモルポットを守備表示に変更しますぜ。」

メタモルポット

2

D E F F 6 0 0

「そして俺はダーク・ボルテニスでBF・アームズ・ウィングを攻撃。」

「じゃあ、ダメージステップに入るぜ。」

「待つて下せイ。俺はダメージステップに入る前にマインド・クラッシュを発動。」

「何!？」

「俺はカードを宣言し、そのカードが相手の手札にあつた場合、相手はそれを全て捨てる。外れた場合は俺が手札を1枚捨てますぜ。あるんでしょう、俺が宣言するカードは『BF・月影のカルート』ですぜイ。」

「くっ……」

土方の手札

闇の誘惑

BF・月影のカルート

BF・そよ風のブリーズ

「じゃあ捨ててもらいますぜ。」

「くそ……」

土方はやむを得ず、月影のカルートを捨てた。

「じゃあ、バトル。ダーク・ボルテニスでBF・アームズ・ウイングを攻撃。土方虐殺波!!!」

「テメー、カードゲームで俺を虐殺する気か!!!」

土方 LP3400 2900

「ちつ．．．．．だがBF・アームズ・ウイングが戦闘によって破壊された時、俺はブラック・サンダーを発動！ お前のフィールド上のカード1枚につき、400ポイントのダメージを与える!!!」

沖田のフィールド

ダーク・ボルテニス
天空聖者メルティウス
トーチ・トークン
メタモルポット
伏せカード1枚

沖田 LP5050 3050

「じゃあ天空聖者メルティウスで土方を攻撃。土方死ね死ね光線!!!」

土方 / LP 2900 1300

「俺はメインフェイズ2に入り、モンスターをセットしてカードをセット。ターンエンドしますぜ。」

沖田 / LP 3050

手札 4枚

モンスター / 天空聖者メルティウス、ダーク・ボルテニス、トーチ・トークン、メタモルポット、裏側守備表示モンスター1体
魔法・罠 / リバース×2

「俺のターン！俺は闇の誘惑を発動！カードを2枚ドロし、手札のBF - そよ風のブリーズを除外する！」

「ここでドロですかい。」

「（どうやら魔法カードを無効にするカードは伏せていなかったか。それとも冥王竜ヴァンドルギオンが手札に無くて温存しているだけか・・・）俺はモンスターをセットし、カードを2枚セットする。ターンエンドだ！」

土方 / LP 1300

手札 0枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター1体
魔法・罠 / リバース×3

「（散々苦勞かけたが、この伏せカードの発動に成功すれば・・・状況を裏返せる！！）」

土方は落ち着き始めた・・・

「俺のターン・・・」

「この瞬間、俺はセットしたBF・大旆のヴァーユをリリースし、その伏せカードを2枚破壊する！」

「何！？　じゃあ、ゴッドバード・アタックにチエーンしてトーチ・トークンをリリースし、闇霊術 - 「欲」を発動しまさア。」

「何だと！！　アルテミスあんのにドンだけ欲深えんだテメーは！！？」

「俺は別に欲深いんじゃないんで腹黒いだけでさア。それより土方さん手札がありませんので見せる魔法カードはありませんね。　じゃあ遠慮なく2枚ドロウしまさア。」

「んぐぐぐぐぐ・・・（やっぱりこいつムカつく！）」

破壊されたカード

聖なるバリア・ミラーフォース・

「俺はモンスターを反転召喚しますア。」

闇の仮面

2

ATK900

「闇の仮面の効果を発動。墓地から罫カードを手札に加えますぜ。俺は墓地から神の警告を手札に加えますぜ。」

「（神の警告か．．．迂闊に召喚できなくなってしまったな。）」

「じゃあ、俺はダーク・ボルテニスでダイレクトアタック。土方虐殺波！！これで終わりだ！！」

「フツ．．．．．」

「!?!」

「油断したな、総悟．．．．．」

「!?!」

「俺はBF・バックフラッシュを発動！自分の墓地に『BF』と名の付いたモンスターが5体以上存在し、相手プレイヤーが直接攻撃宣言した時に発動できる。相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！！残念だったな、総悟。」

「ちっ．．．．．」

そうだ．．．．．土方は状況を裏返えす事が出来た．．．．．
だった筈なのだが。

「まあ、そんなの予想してましたぜ土方さん。」

「何!？」

「俺はメインフェイズ2に入り、死者蘇生を発動。墓地から墮天使スperlビアを特殊召喚しまさア。」

墮天使スperlビア

8

ATK2900

「!! まさかアヌビスの裁きのコストで捨てた奴か!？」

「その通りですぜイ。墮天使スperlビアの効果が発動。墓地から天使族モンスター、豊穰のアルテミスを特殊召喚しまさア。」

豊穰のアルテミス

4

DEF1700

「そして豊穰のアルテミスをもう1体召喚しまさア。」

豊穰のアルテミス

4

ATK1600

「土方さん、あんたはもう袋のねずみですぜ・・・」それはどうか
な、総悟?」 え?」

「この瞬間を待っていた!! 俺は激流葬を発動!!」

そう、土方にはもう1つの手段が取って置きがあったのだ・・・

「何!! (まさか土方の奴、スペルビアを使う事を計っていたのか!?)」

「これでお前のモンスターは全滅だ!」

「ちっ、俺はカードを3枚セットし、ターンエンドですぜ。」

沖田 / LP3050

手札2枚

モンスター / なし

魔法・罾 / リバース × 3

「(大丈夫だ、俺の伏せカードは天罰と魔宮の賄賂、そして神の警告・・・さらに手札には冥界竜ヴァンダルギオンがある。土方、

「どうあがこうとお前の負けだ。」

「俺のターン！俺は墓地のBF - 大旆のヴァーユの効果を発動だ！」

「この瞬間、俺は手札を1枚捨て、天罰を発動。大旆のヴァーユの効果の発動を無効にしますぜ。」

手札コスト

救済のレイヤード

「何考えている総悟？大旆のヴァーユは1ターンの効果の発動制限が無い！」

「分かってますさ。俺は手札の冥王竜ヴァンダルギオンの効果を発動しますア。特殊召喚ですぜイ。」

冥王竜ヴァンダルギオン

8

ATK2800

「さらに冥王竜ヴァンダルギオンの効果を発動。効果モンスターの効果を無効にした為、墓地からモンスターを特殊召喚ですぜ。」

墮天使スペルビア

8

ATK2900

「さらに墮天使スペルビアの効果を発動。墓地からダーク・ボル
テニスを特殊召喚ですぜ。」

ダーク・ボルテニス

8

ATK2800

「これで土方さんは終わりですね。」

「だったら俺はブラック・ホールを発動だ！！ これでお前のフイ
ールドは全滅だ！！」

「それもさせませんぜ、土方さん。俺は魔宮の賄賂を発動。ブ
ラック・ホールの効果を無効にし、破壊させますぜ。」

「何！？」

土方の頼みの綱が破壊された……彼はもう負けなのか？

「俺は魔宮の賄賂の効果でカードをドロウする！」

「土方さん、そろそろ諦めませんか？ どう考えてもあなたの負け
ですよ。」

「うるせえ、諦めるか！ お前を相手に負けてたまるか！！」

「土方さん、いい歳こいてかつとピングですかい？」

「うるせえー！！ ドローだ……！！」

魔宮の賄賂の効果によってドローした土方の表情が一瞬変わった。

「俺は貪欲な壺を発動！！」

「土方さん、チートドローもいい加減にして下せえ。」

「テメーに言われたかねえよ！ モンスターを5枚デッキに戻し、カードを2枚ドローだ！」

デッキに戻すカード

ブラック・ローズ・ドラゴン

B F - 疾風のゲイル

B F - 蒼炎のシユラ

B F - 月影のカルート

B F - 極北のブリザード

「俺は墓地のレベル6のB F - 漆黒のエルフィンとレベル1のB F - 大旗のヴァーユを除外し、エクストラデッキからレベル7のB F - アーマード・ウィングを特殊召喚する！」

B F・アーマード・ウイング

7

ATK2500

「俺はB F・アーマード・ウイングで冥王竜ヴァンダルギオンを攻撃！」

「何やってんですか、土方さん。ヴァーユのせいでアーマード・ウイングの効果は無効にされてますぜ。」

「フン……………」

「ん……………まさか!?!」

「俺は手札のB F・月影のカルートの効果を発動！ このモンスターを捨て、攻撃力を1400ポイントアップさせる！」

B F・アーマード・ウイング

7

ATK2500 3900

沖田 LP3050 1950

「まさか貪欲な壺で引くとは……………だが俺のライフはまだ大丈夫ですぜ。」

「さらに俺はダーク・バーストを発動！ 墓地から攻撃力1500以下の閻属性モンスターを手札に加える！ 俺が加えるのはBF・月影のカルートだ！！」

「！！」

「ターンエンド！！」

土方 / LP 1300

手札 1枚

モンスター / BF - アーマード・ウィング

魔法・罫 / なし

「（くっ．．．．．土方さんの手札にはカルートがある。）俺はモンスターを守備表示に変更してターンエンドですぜ。」

堕天使スペルビア

8

DEF 2400

ダーク・ボルテニス

8

DEF 1400

沖田 / LP 1950

手札 1枚

モンスター / 墮天使スぺルビス、ダーク・ボルテニス

魔法・罾 / リバース × 1

「俺のターン！ 俺は死者蘇生を発動だ！ 死者蘇生の効果で・・・
・・・BF - アームズ・ウイングを特殊召喚だ！」

BF - アームズ・ウイング

6

ATK 2300

「!!!」

「残念だな、総悟。 神の警告があっても肝心のライフが足りなければ使えないな。」

「.....」

「守備表示にしたのが間違いだったな。 BF - アームズ・ウイングでダーク・ボルテニスを攻撃！ このダメージステップ、俺は手札からBF - 月影のカルートの効果を発動！」

BF - アームズ・ウイング

6

ATK 2300 2800 4200

沖田 LP19500

土方 WINNER

「よし、真選組はトシに決定だな。」

「ち、負けたか。」

「じゃあ、真選組の名誉の為に頼んだぞ！」

「はいはい………」

こうして真選組代表は土方 十四郎となった。

そして大会当日………

竜宮城

「長谷川殿、これでもう、お前は一流のデュエリストじゃ。」

「はい!!」

「このデュエル大会で頑張ればマダオールプから抜け出せる筈だ。
絶対頑張るのじゃぞ。」

「師匠~~~~!!」

グラスンをかけたおっさんは号泣しながら亀の甲羅を着た老人に抱きついた。

「さあ、出発じゃ!」

グラスンをかけたおっさんに乗せた巨大戦艦は海を走った。

・かまっ娘倶楽部・

そこにはオカマの集団がいた。

「じゃあ、私が大会に行っている間に店の番を頼んだわよ。」

「はい、ママ〜〜〜!!」

「じゃあ行くわよ、てる彦。」

「うん、母さん。」

「頑張れ、ママ〜〜〜!!」

オカマ達は親子に手を振った。

- 飛行船 -

「じゃあ皆の者、俺は攘夷志士の為にも頑張る。」

「頑張ってください、桂さん、エリザベスさん。」

「空からあなたの活躍を見守っていきます。」

飛行船の中には集団たちが長髪の男性と大きな白いペンギンのような生き物を見送っていた。

「じゃあ、行ってくるな。」

『攘夷志士の名誉を上げて帰ってくるぜ。』

白いペンギンのような生き物はプラカードで会話をした。

「フン．．．それから桂じゃない．．．フェニックス・カッターだ！！行くぞエリザベス！！」

『はい、フェニックス・カッターさん！！』

そう言って、桂とエリザベスと呼ばれた者は飛行船を飛び降りた。

「イヤッホウウウウウ！！」

『いやっほっつっつっつ！！』

・万屋銀ちゃん・

「ようし、お前達．．．．．賞金をガッツリ稼ぐぞ！！」

「「おおおおー！！」」

万屋3人組も準備は万全であった。

こうしてデュエル大会が始まるのであった。

UNU

第三訓 外道というのはカードによって決まるものではなく使い道によって決まる

土方

使用デッキはガチBF

名称【鬼の副長だけに鬼畜】

沖田

使用デッキはエンジェル・パーミッション

名称【腹黒いDSな天使】

沖田が拷問車輪を使うと思った人、廊下にたつてなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4052t/>

遊戯王～銀色の魂～

2011年10月6日16時46分発行